栽培漁業と住民との交流を中心とした青年部活動について

四海漁協後継者協議会
会長　島　本　勝　彦

1 地域の概要

四海地区は、小豆島の北西部に位置し、人口約2,700人の漁業と農業を中心に発達してきた地区である。小豆島は観光地として有名であるが、四海にはこれといった観光施設はなく、大きな工場もない。しかし、漁港を中心に集落があり、沖合に小島が浮かび、自然の残された典型的な瀬戸内海の風景が広がっている。

2 漁業の概要

四海漁協の組合員は、正87人、準35人の計 122人である。主な漁業は小型機船底びき網（以下「底びき網」と略す）、ノリ養殖、サワラ・マナガツオ流し網、建網、釣などで、なかでも底びき網は59経営体が営み、中心的な漁業である。平成８年度の総水揚げ金額は漁船漁業で６億３千万円、ノリ養殖で３億６千万円の計９億９千万円である。

3 研究グループの組織と運営

四海漁協後継者協議会は昭和55年に結成した。会員は、現在、42歳未満の漁業後継者24人で、このうち会長１人、副会長１人、監事２人、会計１人の役員をおいている。活動費は会費のほか、組合、町からの助成金などでまかなっている。

4 実践活動課題選定の動機

協議会の結成のきっかけは、中心漁業である底びき網の将来のため、栽培漁業に取り組むことにあった。四海地区は漁場に恵まれたこともあり、他地区に比べると後継者は多いが、結成当時、漁獲は減少傾向で、このままで、底びき網で生計を立てていけるだろうか、将来、子供達が後を継いでくれる海が残っているだろうかという不安が私たちにあった。

そういった頃、漁協の役員や県漁連、水産課、水産試験場の方々から、「青年部を作って栽培漁業に取り組んではどうか」と相談され、また、「あなたたちから行動を起こさなければならない」と説得され、私たち後継者は熱い思いを持って協議会を結成した。

5 実践活動状況及び効果

協議会の活動は、結成当初からの中心課題である中間育成による栽培漁業の推進に大きな比重をおいている。また、最近は地域の催しへの参加など、住民との交流も図っている。以下に主な活動内容を記す。

（１）クルマエビ・ガザミ・ヒラメの中間育成・放流など

結成直後の昭和56年からクルマエビを、58年からガザミ、62年からヒラメの中間育成に取り組んでいる。種苗や必要な施設は組合が購入し、協議会は中間育成作業を担っている。

表１～３に過去の育成結果を示す。当初は、海上の小割生簀のみで育成していたが、クルマエビの大型化とヒラメの歩留り向上を図るため、平成５年には陸上水槽を建設しても

らい、現在は両方を併用している。放流サイズは小型だが、施設、人手などから更なる大型化は難しい。しかし、育成に適した干潟が近くにあり、ある程度の定着あると考えている。

また、ガザミについては、更に昭和59年から漁獲された抱卵ガザミを即放流することにした。このことは、組合に申し入れをして、当漁協組合員全員が守ることとし、以後、現在まで継続している。

図２～４に放流魚種の漁獲量の推移を示す。近隣の漁協でも放流しており、天然資源の変動もあるので一概には言えないが、放流に取り組む以前とそれ以後を比較すると増加していることがわかる。なお、平成７年は前年の異常高水温の影響で、いずれも極端な不漁となったが、8、９年には回復傾向にあると思う。

（２）あげ地フェスティバルへの参加

四海漁協のある埋立地（あげ地）には、郵便局、派出所、農協、公民館もあり、地域の中心地となっている。平成７年、郵便局がこの各組織に呼びかけて、住民を対象としたフェスティバルを行うことになった。漁協からは協議会と婦人部が参加し、協議会では魚を販売することとなった。四海漁協の組合員は、普段は漁獲物のほぼ全量を岡山県に出荷し、地元では販売してない。そこで、新鮮な魚を住民の方に食べてもらおうと、前日、５隻の底びき船が特別に出漁して魚を用意し、もうけは考えず、低価格で販売することにした。当日は、魚目当ての住民の方がたくさん来られ、飛ぶような売れゆきであった。そういうこともあって、この催しは毎年10月に開催されることになった。

（３）小学１・２年生によるヒラメの放流と地区運動会

農漁業を中心に発展した四海地区であるが、最近はサラリーマン家庭が多く、漁業を知らない児童も多い。平成８年、ＰＴＡから小学１・２年生に体験学習できるものはないか、と相談があった。ちょうど中間育成中であったヒラメの放流を手伝ってもらうことにした。簡単に説明をした後、膝まで水につかってヒラメを放流してもらった。この事業は９年も引き続いて実施している。

また、９年は地区の運動会に協力した。毎年運動会は日曜日に行われているが、漁業者は土曜日が休日で、日曜日は落ちついて参加できない。以前からたまには土曜日にしてほしいと要望していたが、ようやく土曜日に開かれることになった。そのかわり、アナゴのつかみ取り競争をするからアナゴを手配してほしいと依頼がされ、底びき網でとったアナゴを約1,000尾用意した。当日は、運動会の最終競技として行われ、運動会は大いに盛り上がった。しかし、サラリーマンの親の中には来られない方もいて、運動会はやはり日曜日でよいと思った。アナゴも続けてもよいと思う。

（４）ヤングレディ１日水産教室の開催

協議会の活動は、中間育成を中心に打合せ、作業など相当の日数を要する。平成８年を例にとると、役員で57日、役員以外では30日に及んでいる。休漁日を利用した活動が多いため、若い会員の中には遊びたい気持ちを抑えて参加している者もいる。そこで、何か楽しい活動はないかと考え、平成８年にヤングレディ１日水産教室を開催することにした。この事業は、漁村に都市の女性を招き、漁業の見学、魚の料理実習などを通じて漁業の理解、魚食普及を図るもので、県などが主催で行っているが、今回は、司会、進行をはじめ協議会が事業主体となって開催した。漁業の見学は、客船をチャーターして底びき網を見

学することにし、調理実習はゲタ（シタビラメ）の皮むきを行うことにした。底びき網でとれる小型のゲタは単価向上のため、船上で皮をむいて出荷しているので、全員が得意な調理である。当日は、島内及び高松市から18名の独身女性が参加し、楽しい１日を送ることができた。しかし、役員は何回も打合せを重ねるなど大変だったので、この事業は２年に１回程度と考えている。

6 波及効果

これらの活動を通じた波及効果としては、漁協役職員、年配の組合員が協議会の活動に理解を示し、協力をいただいていることである。中間育成施設の整備や、抱卵ガザミの再放流などは一例であるが、若い者の言うことにだいぶ耳を傾けてくれるようになった。

また、土曜日に運動会が行われた背景には、フェスティバルや小学生による稚魚の放流など、地域とも密着した活動を行ったことで、その行動力をかわれ、地域活性化の核としての期待もあるのではないかと思う。今後も積極的に地域の催しに参加したいと思う。

7 今後の課題

四海地区でもやはり年々若い漁業者は減少している。中間育成の作業も慣れたとはいえ、期間中の休日はほとんど潰れてしまう。種苗の大型化を図るには日数の短縮はできないので、作業の効率化を更に進める必要があると思う。

最後に、かつての会員の子供が、今５人会員となっている。私たちの活動が後継者の確保に少なからず貢献していると思う。

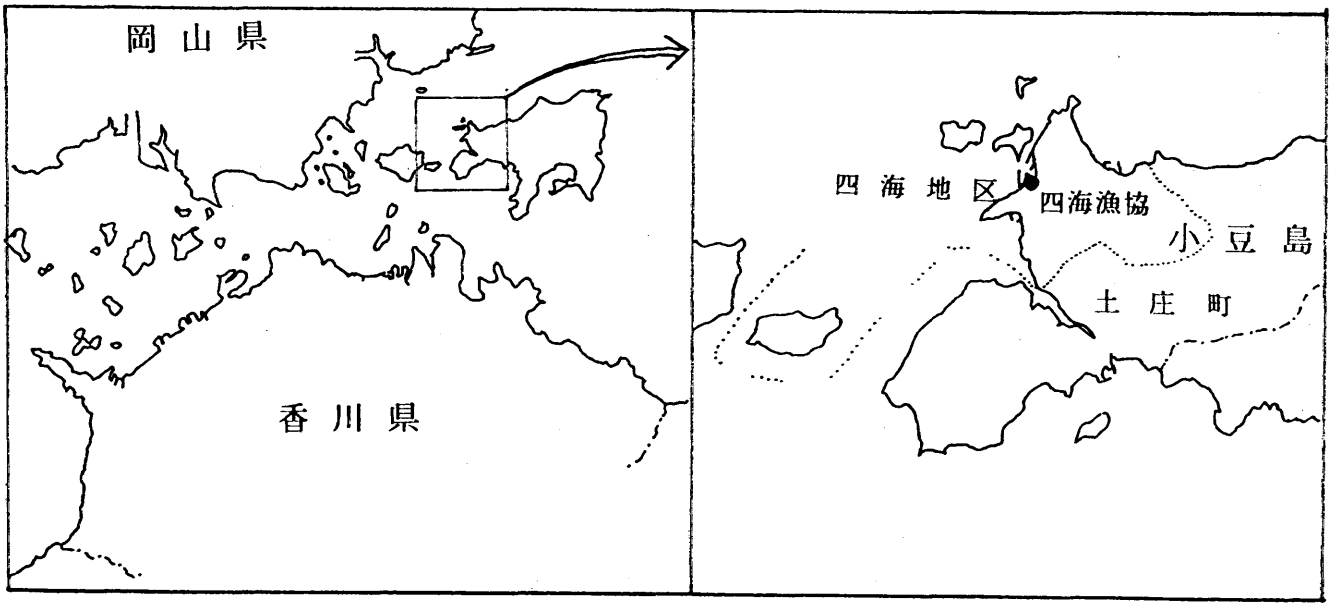

図１　四海地区の位置

表１　クルマエビ中間育成結果

年	収容尾数（千尾）	収容時全長（mm）	放流尾数（千尾）	放流時全長（mm）	飼育日数	使用施設 ※1 海上小割	使用施設 ※2 陸上水槽	歩留り（%）	備考
昭 56	1,030	16	499	20	13	3台		48	
57	4,495	12～16	747	20～39	11～15	15		17	
58	3,865	11～13	1,532	18～38	9～12	14		40	
59	2,129	16	1,296	20	16	7		61	
60	2,022	15	1,121	21	9	7		55	
61	2,000	14	1,557	16	7	7		74	
62	2,000	15	866	20	8	6		43	
63	3,200	14	2,281	22	15	7		71	
平 1	2,000	15	1,054	24	13	7		53	
2	2,000	19	245	29	18	6		12	台風で一部逃亡
3	3,000	16	1,625	23	12	8		54	
4	2,554	14	302	26	11	7		12	
5	2,500	14	895	22	14～35	7	3基(82㎡)	36	
6	2,150	13	397	19～23	11～18	6	3〃(〃)	18	
7	2,164	14～15	918	22～29	18～25	6	4〃(101〃)	42	
8	2,000	16	1,125	18～28	9～21	5	4〃(〃)	56	
9	1,440	16	866	25	11～28	4	4〃(〃)	60	

※１：小割の規模はすべて 10×10×(深さ)２ｍ。※２：水槽数と延べ底面積を示す。

表２　ガザミ中間育成結果

年	収容尾数（千尾）	収容時全甲幅長（mm）	放流尾数（千尾）	放流時全甲幅長（mm）	飼育日数	使用施設 ※1 海上小割	使用施設 陸上水槽	歩留り（%）	備考
昭 58	61	4	16	19～20	15	2台		48	
59	551	4	220		15	5		17	
60	381	4	59	10	12	3		40	
61	300	4	43	7	9	3		61	
62～平２の間は中断									
平 3	350	4	174	10	17	4		53	
4	100	4	52	12	10	2		12	
5	80	4	97	12	22	0	3基(82㎡)	54	
6	100	4	38	8～11	18	1	1〃(25〃)	38	
7	100	4	23	15	14	1		23	
8	100	4	14	11	14	1		14	
9	20	6	3	10	7	1		15	

※１　小割の規模は昭和 58 年は３×３×２ｍ、他は 10×10×２ｍ

表３　ヒラメ中間育成結果

年	収容尾数（千尾）	収容時全長（mm）	放流尾数（千尾）	放流時全長（mm）	飼育日数	使用施設 ※1 海上小割	使用施設 陸上水槽	歩留り（%）	備考
昭 62	75	26	7.0	53	30	10m 2台		9	
63	47	26	9.6	35	25	〃 1		20	
平 1	50	24	16.9	41～57	28	5m 4		34	
2	50	38	36.2	51～54	22	〃 3		72	
3	43	25	3.4	49	24	10m 3		8	
4	50	24	3.1	43	38	5m 2		6	
5	70	31	42.7	42	20～75		4基(101㎡)	56	
6	100	26	26.0	31～43	12～22		4〃(〃)	26	
7	100	20	56.6	43～50	31		4〃(〃)	57	
8	134	24	121.2	50	25		4〃(〃)	90	
9	100	29	73.4	62	27		4〃(〃)	73	

※１　小割の規模で５ｍは５×５×２ｍ、10ｍは 10×10×２ｍを示す

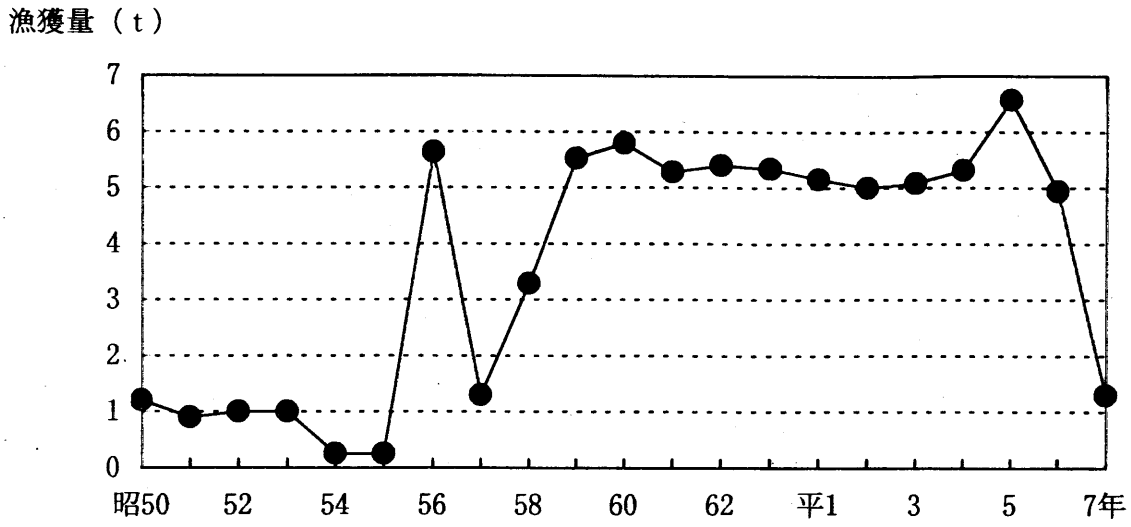

図2　四海漁業協同組合におけるクルマエビ漁獲量の推移

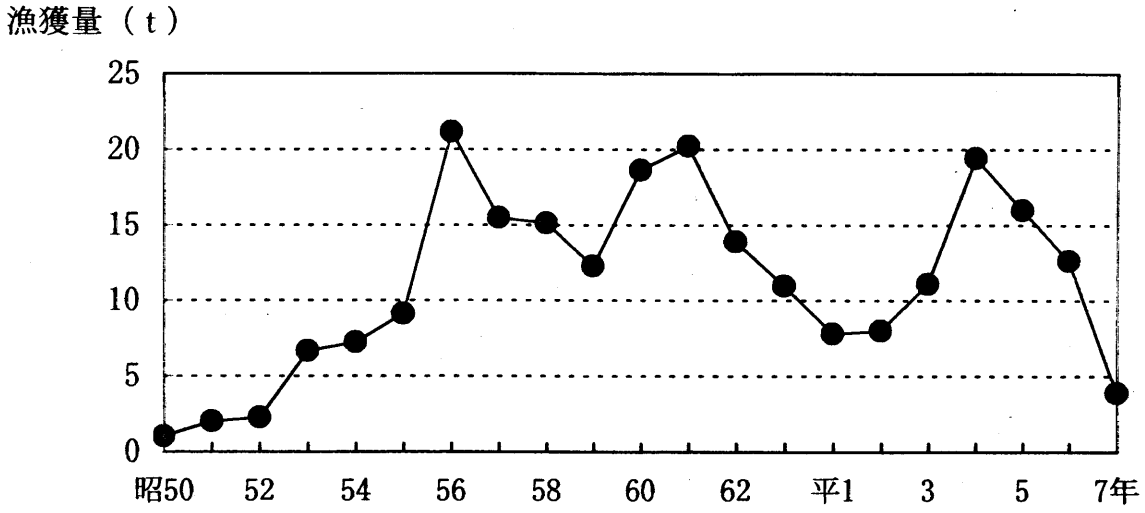

図3　四海漁業協同組合におけるガザミ漁獲量の推移

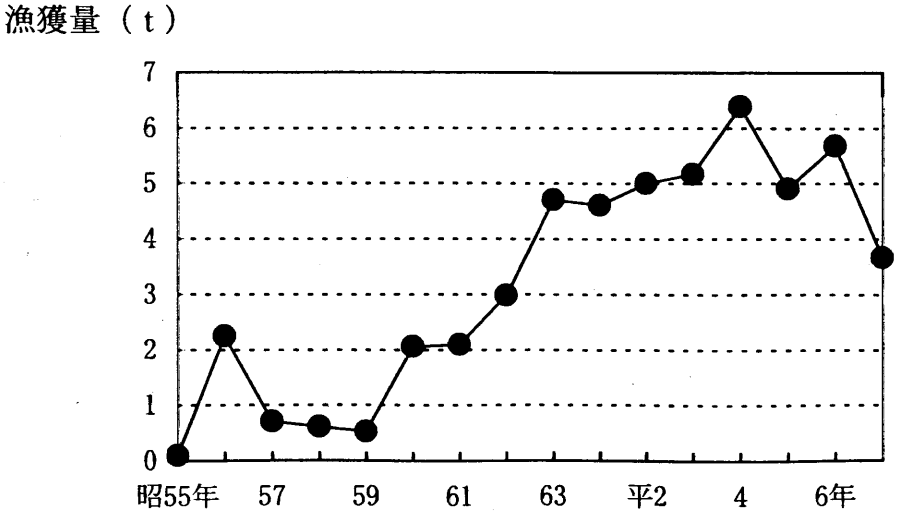

図4　四海漁業協同組合におけるヒラメ漁獲量の推移

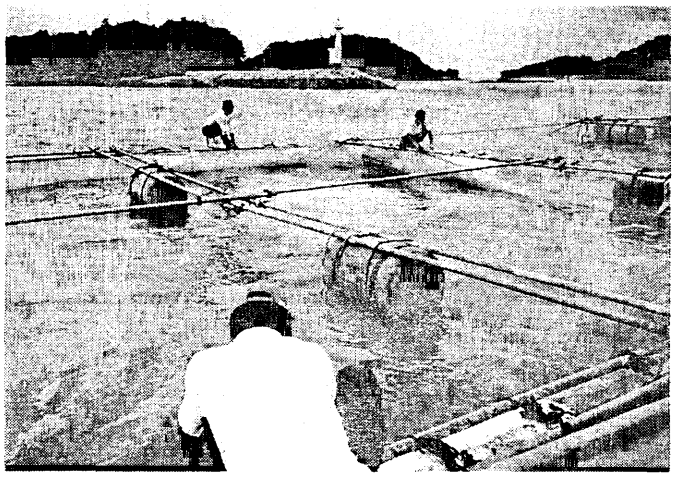

写真1　海上小割網の準備

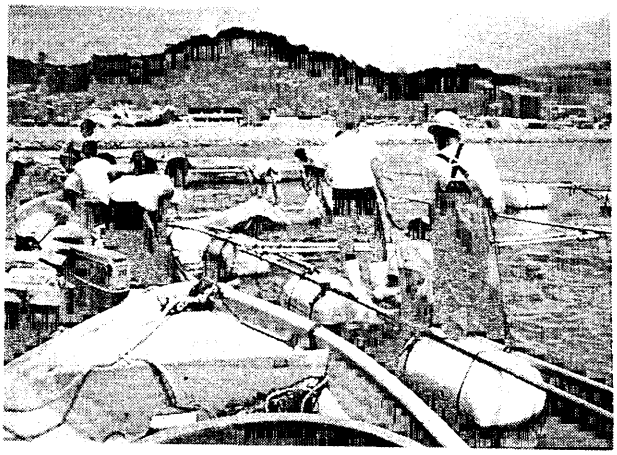

写真2　クルマエビの取上げ

写真3　陸上キャンバス水槽

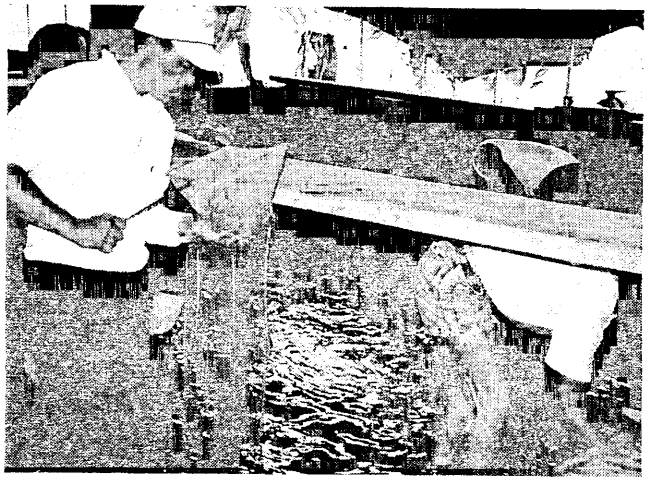

写真4　ヒラメの取上げ

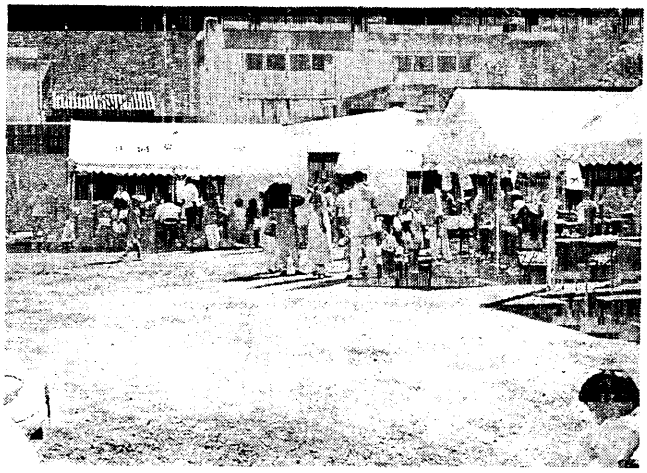

写真5　あげ地フェスティバルの様子

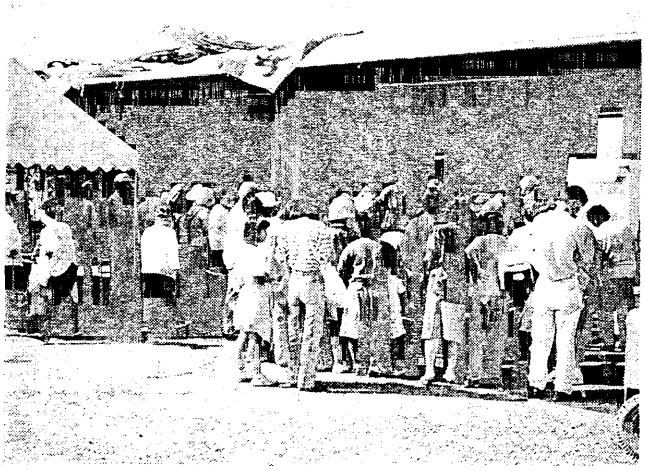

写真6　あげ地フェスティバルでの魚の販売

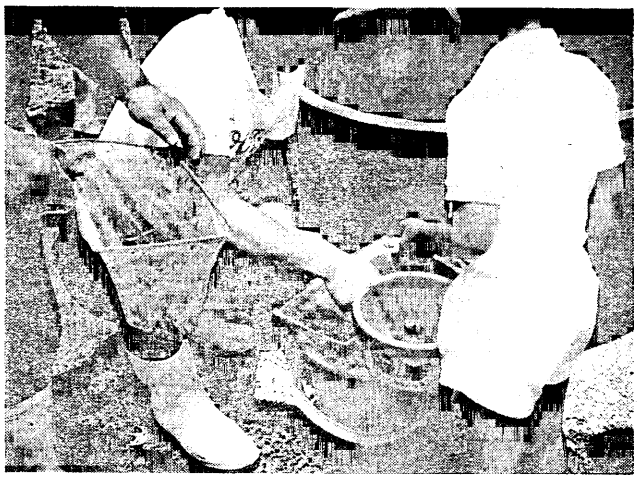

写真7　小学生によるヒラメの放流
（バケツに入れているところ）

写真8　小学生によるヒラメ放流

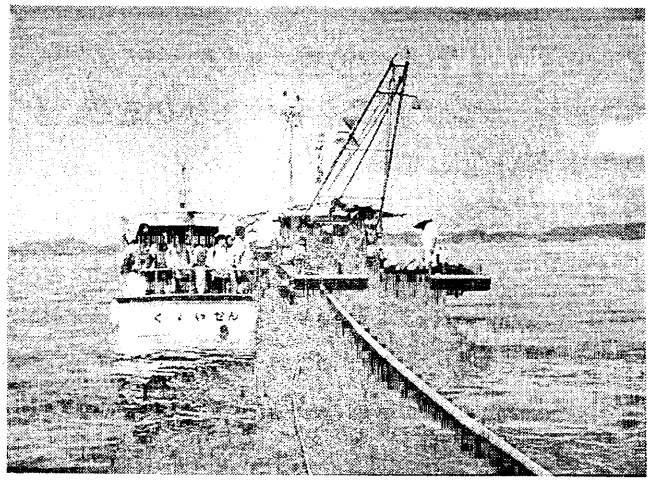

写真9　ヤングレディ1日水産教室
（底びき網の見学）

写真10　ヤングレディ1日水産教室
（魚の調理講習）

写真11　ヤングレディ1日水産教室
（魚の調理実習）

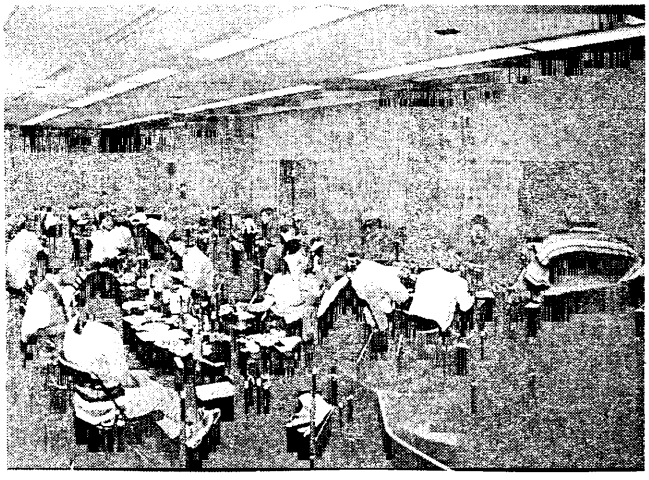

写真12　ヤングレディ1日水産教室
（懇親会）